

30 ダイコン

地域慣行基準

【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
県下全域	15	

※前年秋に有機物の腐熟促進のため、石灰窒素などの窒素を含有する肥料を施用した場合は、窒素成分で4kg/10aを上限に、施用した窒素成分を地域慣行基準に加えるものとする。

(1) 特徴及び吸収特性

ダイコンは初期に根を十分に張らせ、収穫時には葉がしっかり立って下葉が枯れていないような施肥を行うことが目標になる。そのためには**生育初期の肥効を抑え気味**とし、追肥も多すぎず遅すぎないことが必要である。肥料が多すぎると「す」が入りやすく、葉も繁りすぎて根の太りが悪い。下葉も垂れるので軟腐病を誘発する場合がある。

ダイコンは適温下で栽培すると播種後60～65日で収穫でき、根は収穫前10日で著しく肥大する。**窒素は播種後40日目から50日目頃までの間に最も旺盛に吸収**される。窒素は根の外観の肥大に先駆けて吸収されており、収穫前10日間での窒素欠乏の影響は現れにくい。リン酸とカリは生育後半に吸収される量が多い。吸収された養分の内、**窒素は葉と根にほぼ等量ずつ、リン酸とカリは葉に4割、根に6割配分**される。10a当たりの目標収量は4,000kg、養分吸収量は窒素12～16kg、リン酸4～5kg、カリ14～24kg程度である。地力のあるほ場では施肥量を減らす。熟畑化した産地では10a当たり窒素成分で5～10kgしか施肥しないところもある。窒素とカリは40～50%を追肥とする場合が多いが、緩効性肥料を用いる場合は全量基肥でも良い。追肥は多くの場合播種後20日頃までに2～3回に分け行われるが、ダイコンの養分吸収特性から見ると、生育量の少ない播種後30日までの追肥は欠乏症状が見られる場合を除き、生育が旺盛になる**播種後30日以降に追肥した方が施肥効率が高い**と考えられる。播種後30日で葉が立ち上がり始め生育が旺盛になるので、この時期を目安に追肥する。収穫間際の**遅い時期の追肥はす入りの発生を助長**するので行わない。

耕土が深く膨軟な土壌がダイコン栽培に適する。根の形を良くすると共に、通気性、保水性を高めるため深耕する。十分碎土されていないと岐根になりやすいのでロータリーを丁寧にかける。肥料の固まり、作物残さ、未熟堆肥、粗大有機物も根に当たると岐根の原因になる。

目標収量と養分吸収量

目標収量(kg/10a)	養分吸収量(kg/10a)		
	窒素	リン酸	カリ
4,000	12～16	4～5	14～24

